

大陸（朝鮮）

三十二歳の第二国民兵

朝鮮縦断記

佐賀県 田中菊治

歳月の流れと共に、今では戦争のことなど全く知らない世代の人が全人口の過半数を越しております。従って戦争の悲惨さも、恐ろしさも時代と共に風化して忘れ去られようとしています。私達は、大正・昭和と激動の時代を生き抜いて、あの恐ろしい戦争を身をもって体験し、敗戦による混乱と、荒廃した国土、故郷の中で、貧困に耐え、辛酸をなめながら、ただひたすらに祖国復興のため努力してきました。

戦後五十五年を経過する中で、日本国は大きな経済的發展を遂げ、世界第一の長寿国ともなりました。しかし、その陰で、二百六十万人の軍人・軍属が戦没し、内外地で五十万人の人々が犠牲になっているのも事実です。

私たち戦争体験者は、厳しい軍隊生活、凄惨な戦闘、敗戦後の苦勞を経ながら、九死に一生を得た幸福な人生に感謝しています。しかし、夫や、子供や、親・兄弟を戦場に送り筆舌に尽くせぬ思いをし、特に御遺族となられた無数の人々がいることを忘れることはできません。

このような体験と事実を記録してとどめることは、生き残ることができた私たちの責務であります。そのことが、平和の尊さ、戦没者の靈を慰め、二度と先人

の轍を繰り返さぬことへの戒めとなればと思ひ、私のつたない体験話を申し上げます。このことがまさに「平和の礎」となればと、ひそかに念じるものです。

私が生まれたのは大正二（一九一三）年、国民の義務である徴兵検査、当時、一般の人々は「兵隊検査」と申しております。昭和八（一九三三）年、二十歳になった私の徴兵検査の結果は、身長が足らず、いわゆる「寸足らず」で、丙種合格の第二国民兵役に編入されてしまったのです。その頃、昭和六年に満州事変が勃発して以来、国内では「非常時」と呼ばれている時代でした。甲種合格者は現役兵として入隊し、乙種の人は補充兵役として、必要に応じて召集されるといふ兵制でした。

従いまして、丙種とは、九州男児として世間に肩身の狭い思いではありました。私は兵隊には縁のないものと思つて諦めましたが、当時の気持ちは「どうしようもない」という複雑なものでした。

そのため、翌九年、少しでも国や郷土のためにもと

思いながら、平原産業組合に就職しておりました。しかし、時代は、上海事変となり、昭和十二年七月には支那事変となり、戦争は中国本土へと拡大していきました。郡内の知人等の乙種合格者の補充兵役の者は続々と召集されるようになり、国民兵役にも簡閲点呼（陸・海軍の予備役、後備役の在郷軍人を召集して）が始まりました。兵役には縁がないと思つていた私の周囲の状況は、軍国色に包まれてきました。

昭和十六年十二月八日、日本国は米英蘭に宣戦布告、真珠湾攻撃、戦線は南方に拡大し当初の戦勝に次ぐ戦勝の空気は段々と深刻さを増してくるようになります。「戦局は拡大し、いよいよ重大な局面を迎えたようだ」と、私自身も感じるようになっていました。

忘れもしない、昭和十八年八月二十日、丙種合格国民兵の私にも、臨時召集令状が来しました。「いよいよ覚悟の時が来た」と、緊張の気持ちであったことを今でも思い出します。

令状には、「八月二十三日 下関重砲兵連隊に入隊すべし」とあります。明後日には入隊です。私は令状

を受け、早速職場の事務処理や事務引き継ぎ、挨拶回りもそこそこ慌ただしい一日が過ぎました。

二十三日には出発です。親戚の者や部落の人々に見送られ、浜崎駅を後にしました。役場の兵事役と義兄の石崎一郎が付添人となって、入営を見届けてくれました。これが、最後になるかも知れぬと、心に決めての入隊でした。

隊では、入隊時の身体検査がありました。支給された軍服に着替え、私物は面会所で待つ義兄に渡ししました。兄は「何か言い付けはないか。元気で頑張れよ」と励まして、私物の入った風呂敷包みを受け取ると営門をくぐって見えなくなりました。これが、兄弟の今生の別れになろうとは、神様だけが知っていたのでしょう。義兄は昭和十九年一月、再度の召集を受けて「南方方面で戦死す」という通知があったということ、ずっと後で知りました。私にとって、励ましてくれた、あの時の義兄の顔を今でも忘れることができません。

昭和十八年八月二十三日、この日に、私・田中菊治

という、三十二歳の背の低い初年兵が誕生したので、私と同日入隊した同年兵一同は、兵舎に入ることなく（兵舎は兵隊でいっぱい、私たちの入る余地がなかったのか？ 分かりませんが）、営庭に設営された幕舎で一週間を過ごしました。そして、命によって「重砲兵第三連隊、満州第一二一五部隊」に転属となりました。

八月三十一日、いよいよ下関港を出航、同日朝鮮の釜山港に上陸しました。初めて見る異郷の地であり、すから緊張した心境でした。軍用の貨車に乗り北上、一路満州へ、この列車は臨時列車です。一般列車のダイヤを縫って走るのですが主要な駅で停車することはないが、乗降客の少ない駅で停車する。我々は一斉に飛び降りて用便する。ノロノロの鈍行列車なので、満州国、牡丹江省、下城子に到着したのは九月六日でした。

満州の部隊に転属を下令された時から、広大な大陸、極寒の地であるから防寒のれんが作りか、コンク

リート造りの建物、その内部の設備も完備している兵舎をイメージに探していました。

駅には部隊から迎えるのトラックが待っていました。

我々は、そのトラックに乗り、兵舎の前で下車しましたが、兵舎は、先に想像したものとは裏腹で、山の丘陵地に、木造の小屋みたいな建物が点在していたのです。「これが兵舎だ」と聞きました。

兵舎の周辺では古参兵殿が上半身裸体、赤銅色に日焼けをし、丸々太った体で土木作業をしていました。

この時、私は自分の体格と比較し、その逞しさに圧倒されたのが、私の第一印象で、正直なところ「えらい所に来たなあ」と驚きました。

宮庭に整列し、それぞれ中隊への配属が命ぜられ、私は「連隊段列」となりました。「段列」とは、聞き慣れない名称なので「段列」とは一体何なのかと思っていました。

それは、重砲兵連隊なのだが砲は持たず（射撃する任務でない）、弾薬の運搬、資材の調達等、連隊の輜重（軍需品）の取扱いが主な任務であると聞きました

た。

私は、現役兵より十年遅れて入隊した体格も丙種という、身長の低い召集の未教育の初年兵でした。しかし、軍隊は、そのような差別もしない、容赦もない厳しい教育訓練をします。しかも、昼の訓練で疲れ果てていても、夜は夜で内務班の訓練が繰り返される。それは、学科の勉強ばかりでなく、古参兵からの厳しい内務の「しつけ制裁？」も繰り返され、初年兵時代の辛さや苦勞を誰でもなめ尽くしていました。

お互い初年兵時代の体験として、腹が空いて食べることに、疲れて横になるとすぐに熟睡することが一番の楽しみでした。夕食後、酒保で「うどん」の売り出しがある時は、古参兵殿の命で飯盒片手に酒保に駆けつけて、順番待ちで並びましたが、残念ながらやっと二、三人前で売り切れることが再三のことでした。自分のことなら仕方ないと我慢するのだが、命じた古参兵達への言い訳には苦勞したものです。

十月に入ると、冬に備えて木造兵舎の板屋根に土上

げ作業が始まりました。道板を掛けて、モッコで土を担ぎ上げ、板屋根に広げる。窓の下の板壁には土盛りをして厳冬に備える等、防寒対策は内地では考えられないことでした。しかし、せっかく上げたこの土も、四月になれば取り除かなければなりません。

南国の九州生まれの私にとって、満州の冬は耐え難いものでした。零下二十度、三十度と厳しい寒さが続く、浴場から兵舎まで帰る間に、タオルは凍りついて棒のようになり、大便是ピラミッド形に凍りつきます。それを命により、鶴嘴つるくわで崩しモッコで畑へ捨てました。氷片は全部落としたはずなのに、部屋で温まると臭気がぶんぶん漂って困ったこともありました。

第一期の検閲後は自動車手として、交通車の助手として勤務することになりました。任務は下城子駅前の官舎と部隊間の送迎、軍事郵便所との連絡でした。酷寒期には保温車庫(車庫)にある車でもエンジンがなかなかかからないので朝の始動に一番苦労しました。機関部を炭火で温め手動転把(てんば)で回して、やっ

と動き出します。毎日の日課が厳寒、激務の連続でヘルニアを患い陸軍病院で手術を受けました。退院後は兵器係りの助手となりました。

入隊後一年を経過しますと、同年兵は転属、代わりに召集兵が入隊し、ようやく二年兵となりました。

昭和二十年になり、関東軍からも内地、南方等へ転出が多くなり、四月下旬、本隊は間島省、図們西方約五キロの三洞屯に移りました。私は白井少尉以下三十数人の留守隊として兵舎の警備、管理の任務につきました。

昭和二十年八月九日早朝、けたたましい飛行機の爆音に目を覚ましました。入隊以来飛行機の飛ぶことはなかったもので、日本の飛行機は健在かなと思いましたが、当時、ソ連とは日ソ不可侵条約を締結していたので、まさか敵機とは夢想もせず見上げていると、山陰から急降下しては兵舎を爆撃し始めました。兵舎は無残にも破壊されましたが、警備隊の我々には旧式小銃が十丁余りしかない。応戦することもできず、敵機の

爆撃や機関銃掃射を手をこまねく外ありませんでした。

敵機が去った後、官舎付きの家族の安全を守るため、部隊の防空壕に収容することになりました。日中は敵機に狙われるので、日暮れから夜陰に牡丹江へ自動車で護送するので、私は護衛の任につきました。道路は陣地に入る部隊、自動車、牽引車、輓馬部隊等でごった返す中、翌朝やつと目的地に到着することができました。

家族の統率は平岡部隊長夫人が当てられました。牡丹江に入る直前、小川のほとりに停車させ「皆さん、軍人の妻として、女の身だしなみを整えましょう」と凜とした声で指示されました。一晩中黄土の道を走り続け、砂ぼこりだらけです。顔を洗い乱れた髪を直された容姿は今もって忘れていません。

牡丹江で家族を収容する部隊に無事に家族を引継ぎ、任務を終えて、門門の本隊に合流しました。本隊は山中に布陣してソ連軍の侵入に備えていました。私は本部付となり連絡係を命ぜられて、各所に散在して

いる中隊への連絡に当たっていました。

極度に緊迫した状況の中でも、我々の部隊は直接戦火を交えることもなく、数日が過ぎ終戦を迎えることになったのです。その間細かい情報は、連絡係の私にも伝わってこなく、不安な気持ちの連絡でした。しかし、日本軍の不敗、関東軍は健在だと心では思っていました。しかし、状況は急変していました。

八月十六日頃、本部の将校や下士官の言動に何となく動揺が感じられ、我々兵隊も不安な気持ちでしたが、何か分からない緊迫した気配がヒシヒシと身に迫ってくるものがありました。

翌日に図們駅に集合を命ぜられ、被服も一装用の新しい服が支給され、更には真夏だというのに冬衣も携行しろとの指示です。さらにその夜、珍しくも酒、甘味品まで配られ、いよいよ何かあるなという悪い予感がしました。

その予感の中し、「無条件降伏、軍隊解散」と聞いた。まさに、青天の霹靂、驚天動地の一瞬、目がく

らむ思いでした。初めはデマではないかと疑ったが、天皇陛下の放送があったとのこと、これは真実であると思わなければならない。

私の上司に福岡県の久保軍曹がおられ、佐賀県の芹田兵長もいる、同じ九州出身とあって、お互いに行動を共にしようと話し合っていました。一時の停戦ではないので、あるいは捕虜になるのではないか。しかし、関東軍は健在なのだろうか、とにかく、坂本隊長は連絡のため延吉に出発されたから隊長の後を追って行こうか、など語り合っていました。

三人の仲間に、鹿児島県出身の中島曹長が加わり四人となって、夜半ひそかに本部を抜け出して、隊から離れて行動することとなりました。本隊は出発準備をしていましたが、気付かれないようにして夜道を急ぎました。

夜が明けてみると、我々と同様な行動をする何組かの同志がありました。途中で避難する在留邦人や朝鮮の人達からも、日本の敗戦が真実であることを知らされました。

今更、部隊へ引き返すこともできないので、朝鮮半島を南下して帰国しようと決心しました。とにかく、北鮮の上三峰へ向かい、昼夜ぶっ通しで歩き続けたのですから、その苦勞は肉体・精神共言語を絶するものでした。十九日未明、ようやく鮮満国境の図們江河岸に到着することができましたが、幸いにも橋はまだ破壊されていなく、ソ連軍もまだ進出していなかったの

で、無事対岸の上三峰に到着できました。連日の走るような強行軍に疲れはて、死んだようにぐっすりと眠りました。目を覚まし今後の行動につき相談しましたが、中島曹長は清津の知己の所に行くことになり、我々三人は、急いで会寧方面に出て、南鮮を目指して出発しました。

これから先は軍服姿では行動ができないので、住民の朝鮮服と交換し、中古の地下足袋、小さなアルミ鍋、塩と味噌をもらい、雑のうには着替えと靴下に詰めた米等を携帯して、北朝鮮を突破しようという心算です。しかし、地理は皆目不明、軍票は通用しない。これでは、容易に日本に帰り着くことはできません。し

かし一步でも二歩でも日本へ近付くことだけを心に決めて歩きました。私は農家出身であるから、万一の時は働きながらも帰り着こうと考えていました。

会寧近くになるにつれ、村々には赤い腕章をつけた保安隊が要所を警戒しています。ある村では、日本の統治から解放されたと、戦勝の祝杯をあげていました。我々はこの光景を見て慄然としましたし、会寧に入る直前、保安隊に捕まりそうになったので、三人はバラバラになって山の中へ、死ぬ思いで逃げ込みました。捕まった久保軍曹はソ連抑留となり、昭和二十三年頃帰国したと聞きました。

芹田兵長と私は後で一緒になりましたが、二人は山の奥へ入り、二日二晩山中をさまよひ、太陽で南の方角を確かめ里に下り、人目を避けて行動しましたが、ソ連軍の装甲車やトラックが南下して行くので、逆に道を教えられたようなものでした。

靴下に入れた米も残り少なくなり、畑の作物を無断で頂き空腹を満たして行くうち、在留邦人の避難民と

行動を共にし、女・子供を世話することで食べることも助かりました。一行は咸興に出ることとなり、高い山を越えるのだが、山は夏だというのに子供のオシメが凍りつくような寒さの中で、ムシロや薬にくるまり、震えながら眠れぬ夜を過ごすことも多かったのです。

避難民の足は遅いので、我々はそれを追い越しながら暑い中を歩くので、生水を飲んだため下痢となり疲れて、一時は歩く気力もなくなりましたが、芹田君の「征露丸」で回復することができました。

しかし、食べる物もなくなり、リンゴの皮を拾って食べたり、民家の人から恵んでもらったりで命を繋ぐことができました。咸興近くになるにつれ避難民が多くなり、夜、学校の講堂等に泊まるときは、女の人、机や椅子を隅の方に高く積み上げた囲いの中で眠るようにしていました。

咸興から元山に向かう途中は鉱石運搬列車を利用して、元山からは京元線の軍用列車だけが運行されていて、避難民輸送車は朝鮮人優先であったが、発車間際

に列車の外の扉にしがみつき、手足の痛みを耐え抜いていたが、途中駅で我々は降ろされてしまいました。

しかし、検問所で日本人は隔離留置されてしまいました。したが、用便に行くふりをして、混雑の人の群に紛れ込みました。薄暮の中で服装も汚れた鮮服であったので追跡されることなく逃げ出すことができました。それからは保安隊に脅えながら、幾日歩いたか、食糧はどうしたか、今は記憶がありませんが、恐らく民家の人の恵みで生き永らえたのでしよう。

東豆川では橋にはソ連の検問所あり、渡船場では保安隊に連行を求められました。いくら弁解しても聞き入れてくれない。ここまで来たのに捕まるとは、今までの苦労は水泡となる。そうかといって逃げ出すこともできないと悲痛な思いでした。

途中で前方から復員してくる若い兵隊に出会い、その人に正直に話すと、彼は何か、ニコニコしながら保安隊に話をして私を渡し場に連れて行き、船頭に渡し賃を払ってくれました。まさに、私にとって救いの神であり、今でも忘れることができません。

無事対岸には保安隊もいないし、民家の人は皆親切にいたわってくれました。その時は何も分かりませんでした。それが三十八度線であったのです。囚徒を出て二十数日、山野に寝、食うや食わずの避難行で、人の情けに助けられ、こんなに早く南鮮に着くとは夢にも思わぬ幸運でした。数日後、京城の居留民団の温かいお世話を受け、釜山經由、仙崎上陸し、九月二十日、懐かしい我が家に復員することができました。

軍人や開拓団の多くの人々が帰らぬ人となり、あるいは、シベリアや中国八路軍に抑留された人々の労苦を思うと、今日に至るも胸の痛みを感じ続けております。

勤労報国

平壤で戦車攻撃訓練

栃木県 船山 剛

私は男六人、女三人の九人兄弟の長男として生ま